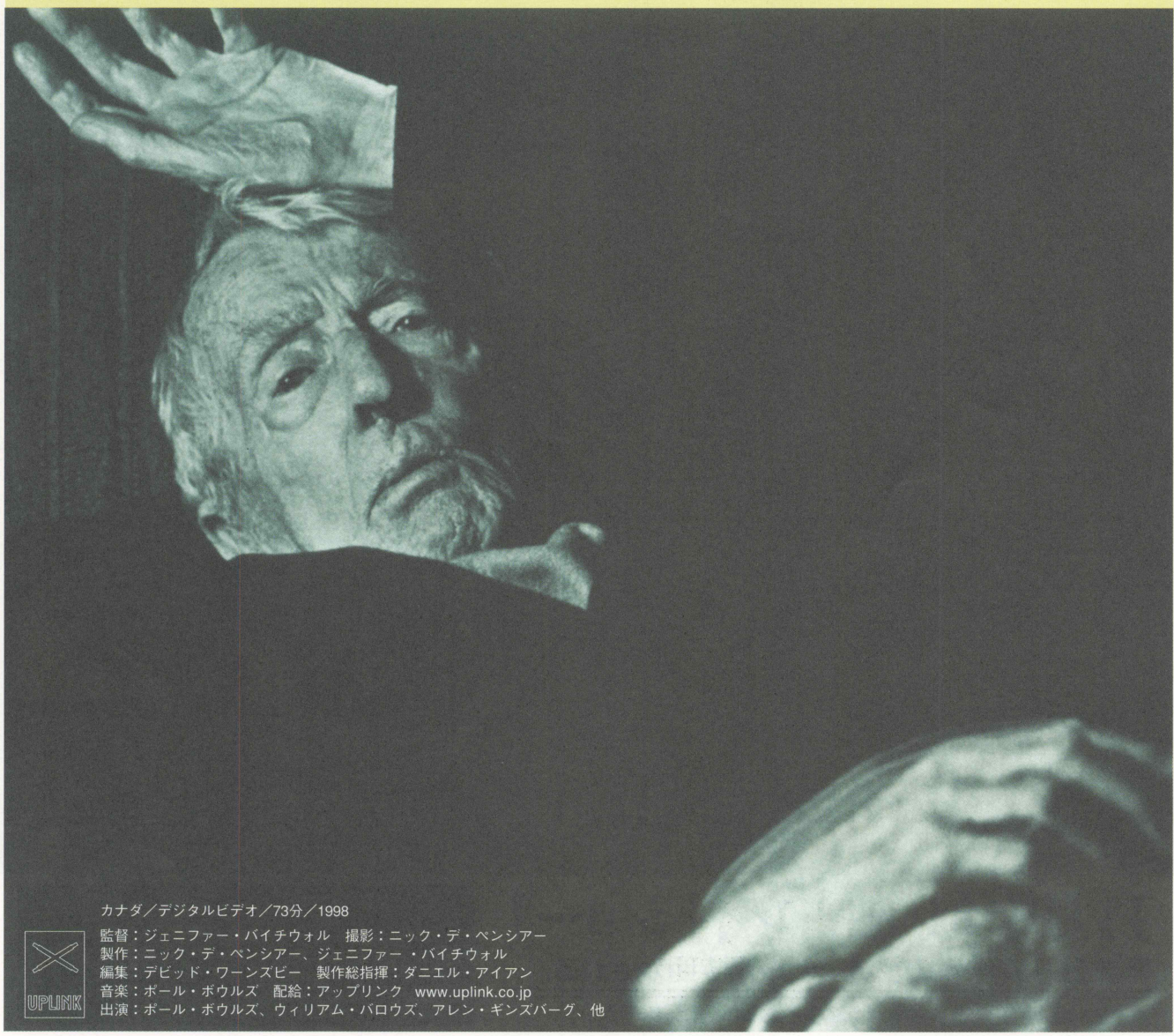


Let It Come Down: The Life of Paul Bowles



シェルタリング・スカイを書いた男
ポール・ボウルズの告白



カナダ/デジタルビデオ/73分/1998

監督：ジェニファー・バイチウォル 撮影：ニック・デ・ベンシアー
製作：ニック・デ・ベンシアー、ジェニファー・バイチウォル
編集：デビッド・ワーンズビー 製作総指揮：ダニエル・アイアン
音楽：ポール・ボウルズ 配給：アップリンク www.uplink.co.jp
出演：ポール・ボウルズ、ウィリアム・バロウス、アレン・ギンズバーク、他





『シェルタリング・スカイ』の作者として知られ作曲家でもあるポール・ボウルズ(1910-1999)。彼の謎の多い私生活が本人の告白と、彼に関わりのあった人々の証言によって剥がされる。中でも最大の見所はボウルズが、パロウズとギンズバーグの2人と生前最後に顔を合わせたニューヨークでの再会の場面だろう。本作は、文学史に神話を築いた作家の素顔を、あますところなく描き、知ら

れざる内面を描き出すことに成功している。ボウルズは生前本作をみて「真実を描いた美しい作品だ」と語った。

REST IN PEACE, Mr. BOWLES.

四方田 犬彦(明治学院大学教授)

ポール・ボウルズは1999年11月に、88歳の生涯を閉じた。若き日にNYのチェルシーで彼とともにあった芸術家たち、ジョン・ケージやオーソン・ウェルズ、ジョセフ・ローゼーといった人々が死んでしまったあともた一人、海岸に打ち上げられた漂着物のようにモロッコのタンジェに留まりつつ、世界中で自分が神話と化していること



にほとんど無関心なままに人生をまっとうした。わたしはポールに尋ねたことがある。生き延びているって、どんな気持ちですか。彼は他の質問のときと同じように答えた。別にどうということもないよ。どうしてこうなってしまったのかわからないし、他にどうなりようがあったというんだね。

生前に名声を欲しいままにした芸術家が、死後たちまちのうちに忘れ去られ、誰にも見向きもされなくなってしまおうという現象は、よくあることである。ボウルズの場合は、おそらくその逆というべきか。1950年代に一世を風靡したこの作家は、70年代にはすっかり忘れ去られ、文学事典に死亡年が誤って記されるまでになっていた。それが80年代中頃から

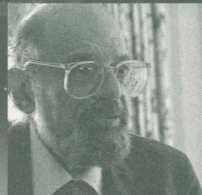
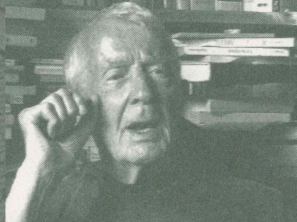


神話的ブームとなり、90年代には日本でのほとんどの書物が翻訳されるようになった。死後、ますます彼の生涯と作品は伝説化され、タンジェは巡礼の地になろうとしている。



このドキュメンタリー作品が興味深いのは、単なるボウルズの紹介とモロッコの観光案内に飽き足らず、彼の生涯の結節点にあたる映像を苦勞して蒐集し、加えてどこまでもモロッコにとって異邦人であるボウルズを批判する現地の目を、キチンと描きだしているところである。

ジェイン・ボウルズを毒殺したといわれている謎のアラブ女性シェリファも、『蜘蛛の家』の美少年のモデルとなったヤクービも、ここに映像として登場している。加えてタンジェのペルベル系小説家であるショックリーが、歯に衣を着せないボウルズ批判を展開する。パロウズとボウルズは、互いの死の直前にNYで再会したが、カメラはその瞬間を逃さず捕らえている。わたしがかっとも感動したのは、ボウルズが自作の歌を懐かしそうに口ずさんでいる場面だった。歌うボウルズ!この場面を撮影しただけでも、この作品の意味はあっただろう。ボウルズの霊のもってやすからんことを。



ポール・ボウルズの告白
シェルタリング・スカイを書いた男

Let It Come Down: The Life of Paul Bowles カナダ/デジタルビデオ/73分/1998

監督: ジェニファー・バイチウォル 撮影: ニック・デ・ベンシアアー 製作: ニック・デ・ベンシアアー、ジェニファー・バイチウォル 編集: デビッド・ワーンズビー 製作総指揮: ダニエル・アイアン 音楽: ポール・ボウルズ 配給: アップリンク 出演: ポール・ボウルズ、ウィリアム・パロウズ、アレン・ギンズバーグ、他



11月中旬 独占レイトショー!

常識破りの作家の謎が、今! 解き明かされる。

※詳細は、近日発表。詳しくは劇場へお問い合わせ下さい。

クリスタ長堀南10番出口すぐ・ソニータワーB1

心斎橋 シネマ・ドウ

(06)6251-3789